

薪をいたゞきがたし、但し小原の女といふことなし、凡かさといふは笠のみにあらず、物覆ふをいふ名なり、合子にかさといふも、おほふ物なればなり、略註はらとは杯の異名なるべし、事物異名酒盃の條に、巨羅巨音坡と出たり、さりながら常の杯とは異なり、照世盃首卷第一回、阮江蘭接酒在手、見那巨羅、是尖底巨腮小口、足々容得二斤多許、是は中ふくらなる下細き杯なり、群碎錄、不落酒器名、白樂天詞、銀不落從君勸とあれば、不落巨羅一音なり、袁中郎が觴政十三杯杓の内に、黃白金巨羅と有、また帝京景物略、城隍廟市のうり物の内、有倭扇、有葛巴刺碗數珠云々、また西域雙林寺條下に、葛巴刺碗者、解項顛骨、而金絡瓣稜、尖如蓮房也、これこ、にていふ佛器猪口なるべし、されば巨羅は異國の碗の名にて、今こッぷといふものと見えたり、こ、にて五山の僧など、酒杯を巨羅といひしより、小蓋をおはらといふ事になりしなるべし、

〔雲錦隨筆一〕武藏野の盃 京師或家の藏に、東山殿時代の蒔畫盃あるよしを聞き、大原木の摸樣なる故に大原と銘す、然れども是は糸底ありて、爾のみ形の異なる事なしとぞ、略歌

〔節用集大全四器財〕武藏野酒盃大者曰武藏野也、言

〔嬉遊笑覽十飲食〕誰袖海に、むさし野はおくゆき淺し、笠さかづきはかさびくなりとかく熊がへ、これをみれば、武さし野は大なれども淺きをいへり、くまがへといへる編笠にあり、其形の杯とみゆ、

〔雲錦隨筆一〕武藏野の盃 攝河近郷の方言に、集會の酒宴闌に成、既に盃を納んとすに及んで、客より主に乞て、最早武藏にして納め給へといふ事を例とす、按するに、古代の作に、武藏野と號し大盃ありて、内一面芒の描金を書たり、正く此武藏野を順盃にして、納め給へと申しを、後世略して武藏といひ、又其風ふうひにて、今様の盃の大なるを出して、納の盃となすをも、武藏と言へるなるべし、平野の郷なる、多治見氏の藏せられしを、爰に摸寫して左に出たり、略圖 其品頗る名作に